

1. はじめに

2. 5年部会のワークショップを受けて

- 5年部会のワークショップについて
＜教科書資料をもとに＞
 - ・人の生き様に迫る社会科
 - ・感動的な社会科

(この部分については、ご提案を基にお話しさせていただきます。)

3. 主体的・対話的で深い学びのための教科書活用のポイント

- (1) 必要で価値のある学習問題、その追究を通して目標が達成できる学習問題を
子供一人一人が明確にするために

＜子供が意欲的に学ぶ問題解決的な学習の展開＞

- 教師自身の「教えよう、分からせよう」とする姿勢ではなく、子供(児童)自身の「分かりたい、「早く調べてみたい」と、うずうずするような状態で学習が進むようにする。

→そのために、次のことを大切にする。

- ・学習対象と子供(児童)とのつながり
- ・社会的事実・事象に当面して、一人一人が多様な疑問・意見をもてる。
- ・新たな事実の提示などによって、一人一人がもった疑問や意見が集約され、学習を方向付け、学習問題の形にまとまっていくようにする。

(驚き→明確な問題意識)

(学習問題の言葉を子供自身が言えることが目的ではない。)

(学習問題の内容的なことを追究したくなる強い思い、目標達成につながる問題意識を醸成したい。)

「5年部会が取り上げた単元『水産業のさかんな地域』の場合」

- ①水産業と自分たちのくらしとのかかわりを押さえる。(日々の食事、好きな食事→お寿司等)
＜アンケートや聞き取り等＞

- ②水産業がさかんである事実を知り、多様な疑問や意見をもつ。→＜教科書資料＞
 - ・主な国の一人当たりの魚や貝の消費量(グラフ)
 - ・主な漁港の水あげ量(地図)
 - ・都道府県別漁獲生産額の割合(グラフ)

- ③漁獲量の減少や漁業従事者の減少といった現在の問題点に気付く→
＜教科書資料+α＞

- ・漁業別の生産量の変化(グラフ)
- ・日本の水産物輸入手量の変化(グラフ)
- ・200海里水域と世界の漁場別に見た日本の漁業生産量(地図)
- ・漁業で働く人の数の変化(グラフ)(資料集より)

↓
「日本人が好きな魚が獲れなくなる?どうなっちゃうの?」

＜学習問題例＞

「水産業がさかんな地域では、どのような工夫や努力をして、わたしたちの食生活を支えているのでしょうか。」

(2) 学習計画の立案と見直し

- 学級や児童の実態によっては、教科書「学習の進め方」のページを活用して、学習問題についての予想を立てたり、調べることや調べ方を明らかにしたりして、学習計画を立て、学習の見直しをもたせる。
- 前単元の「米づくりのさかんな地域」の学習の進め方を想起し、予想や学習計画立案の参考にさせる。
 - ・米作りの工夫や努力
 - ・農家の人々の共同作業
 - ・おいしい米を作る品種改良等の研究
 - ・米が消費者に届く仕組み
 - ・農家がかかえる課題とこれからの米づくり
- 学習計画例（「水産業のさかんな地域」の場合）
 - ①沖合漁業は、どのように行われているのだろうか。
 - ②遠洋漁業は、どのように行われているのだろうか。
 - ③つくり育てる漁業は、どのように行われているのだろうか。
 - ④新鮮な魚が食卓へ届く仕組みは、どのようになっているのだろうか。
 - ⑤水産業のかかえる課題とこれからの水産業（漁獲規制、水産資源の減少、環境問題、研究開発等）

(3) どの子ども自分の考えをもち、それを互いに披露し合い、考えを広げたり深めたりするために（「水産業のさかんな地域」の学習をもとに）

- ①どこでどのように自分の考えをもたせ、対話を通して思考を深めさせるか
「教科書資料をもとに、自分なりに調べた工夫や努力」

◎資料との対話

○工夫

- ・カツオに適した漁法でとる。→一本づり、まき網漁
- ・新鮮で魚を傷つけないかつおの獲り方→特別な針による一本づり
- ・すぐに冷凍できる船の設備（新鮮で刺身に向くかつお）

○努力

- ・季節によって移動するかつおを追って、船も移動しながら漁をする。
- ・魚群探知機で探しても何日も魚の群れに出会えないこともある。
- ・漁が終わるまで、何か月も船に乗っている。

○+α（人の生き様、さまざまな思い等）

◎友達や教師との対話

- 教科書資料等をもとに気付いた遠洋漁業に携わる人々の工夫や努力について、意見交換して、気づきをより明確なものにしたり、新たな工夫や努力に気付いたりする。

<追加例>

- ・揺れる船の上で、踏ん張ってかつおを釣り上げるのは大変→人への迫り方
- ・焼津から遠く離れた海での操業
- ・船の上の緑のテントのようなものの役目

②深い学びのために（産業学習の学びを他人事から自分事へ）

◎教師の発問や助言

例. →意思決定を促す発問

「漁業生産量より消費量が多くなり、不足分を輸入していますが、国内の水産物消費量の落ち込みなどにより、輸入は減少傾向にあります。このままでよいのか、それとも何とかしないといけないうのか、考えてみましょう。」

◎板書の工夫

例. →問題の所在が明確になるような板書の工夫

- ・漁場の制限（200海里水域）・漁獲の制限
- ・漁師の減少（60歳以上の漁業従事者一番多い。
70歳近いかつお一本つり漁師もいる。）
- ・水産物消費量の減少 → これからもこれまでのように魚を食べられるようにするにはどうしたらよいか。

児童の感情に訴えたり、何らかの意思決定を促したりする場面を通して、水産業のかかえる課題を切実感をもって考えられるようにする。

(4) 学習問題の追究を通して学び取ったことを自分の言葉でまとめたり、生かしたりして、資質・能力、社会参画の芽をはぐくむために

◎学習のまとめを表面的な「水産業で働く人々の工夫や努力」だけでまとめない。
→方法的な工夫や努力のみでのまとめでは、深い学びにならない。

◎必要なのは、水産業に携わる人々のこの仕事にかける思い（喜びや願い、やりがい、充実感・達成感、苦労や悩みなど）を知った上でのまとめ

<例>

- ・遠洋漁業に携わる漁師さんは、一本づりなどのとり方やかつおを傷つけず外れやすい疑似餌針、竿など、いろいろ工夫していることがわかった。
また、赤道近くの太陽が照りつける海で、何日もかつおの群れを追い、大変な思いをして命がけでかつおを獲ってきてくれたんだ。今まで結構魚を食べ残していたけど、残さず食べようと思った。
- ・テレビで200海里とか漁獲規制などのニュースが流れていても、今まではあまり関心をもたなかった。でも、ますます魚がとれなくなったら大変。
これからは、もっと漁業のことに関心をもっていこうと思う。

4. 教科書を上手に使いこなすために

○教科書で教える

文部科学省→教科書を教えるのではなく、教科書で教えることを強調。

教科書の内容も隅から隅まで教える必要はないと言われている。

つまり、教科書は、その内容を教えるというより、教科書から様々な知識を学び、能力や態度を育てるための第一教材と考える。

○問題解決的な学習の展開のために有効活用

教科書には、

- ・学習の進め方
- ・学習問題の作り方
- ・調べ方
- ・まとめ方
- ・学んだことのいかし方
- ・ことば
- ・豆知識

等々が、記載されている。

また、側注を活用して質問事項等を示唆するなどして、学び方の定着を重視した構成となっている。それを生かして、自ら調べ考え表現して、目標に迫る問題解決的な学習を通してこそ、基礎・基本の定着が図られると考える。

それだけに、教師がその趣旨を十分に理解して活用していかなければ、学習は薄っぺらなものとなり、子供たちに公民的資質の育成はもちろんのこと、様々な資質・能力の育成を図ることはできない。

どこでどのように教科書を活用するのか、じっくり教材研究しておくことが教師には求められる。

特に扱う予定の資料については、提示の方法、提示順、読み取らせ方等を検討して、きちんと準備しておくことが大事である。また、写真等は、事前に教師自身が読み取

りを行い、どんなことがどのように読み取れるか、発問や補助発問等を検討してしっかり感動的に読み取らせる工夫を考えておきたい。

○**選択事例の活用**→教科書にはいくつかの事例が掲載されている。地域や児童の実態等に合わせて選択したい。また、教科書事例でサンプル学習を行い、他の事例で学ぶ際の視点を学ばせるなど、有効活用したい。

○**まとめの活動例としての活用**

できれば、複数提示したい。サンプルが一つだと、安易にまねてしまう児童も出てくる。また、サンプルは、完成版より、一部の例示で十分な場合も多い。

- ・漁業別の地図づくり
- ・遠洋漁業新聞 等

○**教科書会社等作成のデジタル教材の活用**

→遠洋漁業の動画（かつおの一本釣り風景）

○**評価のための活用法**

- ・自己評価、相互評価のために→教科書の児童作品例との比較
- 教科書の児童発言との比較 等

5. 終わりに

○**教師の授業力の大切さ**

「教科書」のたった1枚の写真、しかし、そこでは、漁師さんや漁のさまざまな工夫や努力が語られています。

それに子供たちをどう向き合わせるか、気付かせるか、しかも感動的に向き合わせるか、それは、教師にかかっています。

子供たちが見逃しても、教師が補助発問や資料を見る視点をアドバイスすることにより、資料のポイントに気付かせたいものです。そのためには、事前の教材研究、教師としての粘り強い追究の目は大切です。

目の前の子供たちをどうしたら夢中にさせられるか、常に考えて授業づくりを行いたいものです。

○**土台としての学級経営**

主体的・対話的で深い学びのためには、学習問題を明らかにして、追究していく力、対話や討論を通して、互いに学び合うクラスが必要です。

日頃の生活の中で、様々な教科・領域の学習の中で、鍛え合い、耕し合い、粘り強く追究していく子供たちを育てていくことが大切です。

そうしたクラスを目指す中で、子供たちは夢中になって追究し、対象となる学習の中で、働く人々の生き様から多くのことを学び取って、自分の生き方につなげていけるのだと考えます。

<参考文献> 東京書籍『新しい社会5年』
東京書籍『社会科教科書の活用法』